

NHK交響楽団

6月公演

NHKSO
NHK SYMPHONY ORCHESTRA
TOKYO

指揮 井上道義 | サントリーホール(土・日)
指揮 下野竜也 | 東京芸術劇場(金・土)

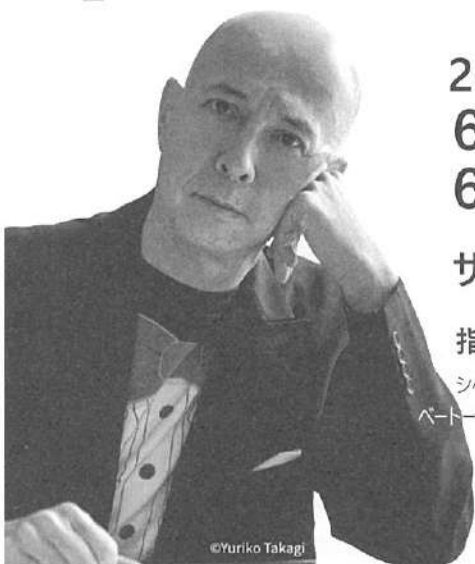
自らの信念に従い
井上道義が挑む
2つの革新的交響曲

2021年
6/5 (土) 6:00pm
6/6 (日) 2:00pm

サントリーホール

指揮: 井上道義

シベリウス/交響曲 第7番 八長調
ベートーヴェン/交響曲 第3番 変ホ長調「英雄」



©Yuriko Takagi

今こそ聴いて欲しい
下野竜也が捧げる
「祈りの音楽」

2021年
6/11 (金) 6:30pm※
6/12 (土) 2:00pm

※終演時刻を繰り上げるため、11日(金)は
6:30pmの開演といたします。また両日とも
休憩は15分間とさせていただきます。

東京芸術劇場 コンサートホール

指揮: 下野竜也

フィンジ/前奏曲
ブリテン/シンフォニア・ダ・レクイエム
ブルックナー/交響曲 第0番 二短調



©Naoya Yamaguchi / Studio Diva

チケット料金(発売中 | 6/5、6、11、12/全席指定/税込)

一般	S ¥7,000	A ¥5,800	B ¥4,500	C ¥3,500
ユースチケット(25歳以下)	S ¥3,500	A ¥2,900	B ¥2,250	C ¥1,750

※ユースチケットはN響ガイドにお電話でお申し込みください。公演日の1営業日前までの受付となり、公演当日の販売はございません。感染症予防対策のため、事前に年齢確認のための登録手続きが必要になります(N響ホームページをご覧ください)。

※車いす席についてはN響ガイドにお問い合わせください。

※N響ガイドでのお申し込みは、公演日の1営業日前までとなります。

※会場での当日券販売は行いません。公演当日に残席がある場合は、WEBチケットN響でのみ販売します。

※未就学児のご入場はお断りしています。(東京芸術劇場公演のみコンサートホールの託児室をご利用いただけます。詳しくは会場のホームページをご覧ください)。

前売所

■WEBチケットN響(手数料無料) <https://ticket.nhkso.or.jp>

■N響ガイド 03-5793-8161

■チケットぴあ 0570-02-9999 pia.jp/t/nhkso/

■e+(イープラス) eplus.jp/nhkso/

■ローソンチケット 0570-000-407 l-tike.com/nhkso/

■サントリーホールチケットセンター 0570-55-0017 suntory.jp/HALL/
(サントリーホール公演のみ)

■東京芸術劇場ボックスオフィス 0570-010-296 www.geigeki.jp/t/
(東京芸術劇場公演のみ)

・NHKホールの改修工事のため、土曜夜・日曜午後に行われていたNHKホールでの公演をサントリーホールに会場を移して行います

・感染症予防対策のため、エリアによって一部座席の販売を制限いたします。なお、国や都からのイベント開催制限等、今後の動向に合わせて収容率は調整いたします

・今後の状況によっては、出演者や曲目等が変更となる場合や、公演が中止となる場合があります。あらかじめご了承ください

・チケットのご購入・ご来場の際には、N響ホームページに掲載の感染症予防対策についてのご案内(下記URLおよび右記QRコードのリンク先)を必ずお読みください www.nhkso.or.jp/news/20200710_2.html



お問い合わせ

N響ガイド TEL:03-5793-8161

(営業日・営業時間はN響ホームページをご覧ください)

6/16(水)、17(木)のサントリーホール公演は
首席指揮者 パーヴォ・ヤルヴィが指揮。
詳細についてはN響ホームページをご覧ください。



出演者プロフィール、公演詳細は
N響ホームページで公開中

主催: NHK/NHK交響楽団

特別支援: 岩谷産業株式会社/三菱地所株式会社/株式会社みずほ銀行/公益財団法人渋谷育英会

特別協力: BMWジャパン/ユナイテッド航空会社/全日本空輸株式会社/株式会社松尾楽器商会/ヤマハ株式会社/株式会社パレスホテル

後援: 豊島区(東京芸術劇場公演のみ)

Follow us on

www.nhkso.or.jp

6月公演の共通テーマは「今、聴いてほしい音楽」

文・西川彰一（NHK交響楽団 演奏制作部長）

日本社会を覆う閉塞感に突破口を開けてくれる井上道義のベートーヴェン -6/5(土)&6(日) サントリーホール

6月5、6日は井上道義の指揮で、交響曲の歴史に転機をもたらした、2つの革新的なシンフォニーをお送りします。

井上道義がイメージするベートーヴェン、それは決して「楽聖」として崇められるような、神格化された存在ではありません。周囲と衝突を繰り返す、遠慮などゼロの人。井上さんいわく「きつと嫌な奴だったに違いない。でも書かれた作品は文句なしにすばらしい」

徹頭徹尾もがき苦しみ、その苦闘の末に生み出されたものが芸術作品として結実した、それがベートーヴェンの音楽だということです。

考えてみれば、これは指揮者・井上道義の生き方にも共通します。念のため、彼のことを「嫌な奴」と言っているわけではありません。ただ、オーケストラのメンバーやスタッフが想定外の注文を受け、面食らうことは度々です。リハーサルでも、他の指揮者なら摩擦を恐れて遠慮する領域まであえて踏み込む。「指揮者は嫌われるのが宿命」と割り切って、自らの芸術的信念に向かって突き進む。妥協をよしとしない井上さんのこうした姿勢が、爆発的なエネルギーを放出する演奏に繋がっていることは事実だと思えます。

言うまでもなくベートーヴェンの《英雄》は、それ以前の交響曲の概念を覆すオリジナリティと、破格のスケールを備えた傑作です。

「ベートーヴェンがなぜこんな途方もない音楽を書いたのか。いまだにわからないが、わかろうとする気持ちは持ち続けている」

数限りなく演奏され、井上さん自身も繰り返し取り上げてきた不朽の名曲に今再び、N響と挑む理由は何なのでしょう。

「いったんステージに立てば、それ以前の経験は関係ない。1回1回が勝負なんだ。今ここでしか作れないサウンド、その瞬間に自分が伝えたいと思った音楽を届けたい」

付度に同調圧力、規制の内面化……、日本社会を覆う閉塞感に、井上道義のベートーヴェンが突破口を開けてくれることでしよう。

規格外と言えば、シベリウスの《交響曲第7番》も相当にユニークな作品です。交響曲と言いつつ、ただ1つの楽章で構成され、演奏時間は20分あまり。とはいえ、主題の提示・展開・再現といったソナタ形式の要素や、アダージョの抒情的な旋律、スケルツォの楽想などは、ベートーヴェンが確立した交響曲の既存のスタイルに則ったもので、これらが単一楽章の中に絶妙のバランスで凝縮されています。特にスケルツォには《英雄》と共通の音型が見られますが、これがプログラム後半への伏線になっている点に気づいて頂けると嬉しいです。

《英雄》とシベリウス《第7番》の共通項、それは2つの音楽が色彩を必要としない、白と黒の世界であることだと、井上さんは言います。一方、音楽の性格は正反対で、ベートーヴェンとシベリウスの両方を得意とする指揮者はそう多くない、だからこそ挑戦なのだ。

井上道義がこれまでN響と共にしばしば生み出してきたマジカルな時空間が、今回もコンサートホールに現れるのでしょうか。どうぞご期待下さい。

● ● ●

苦境の日本オーケストラ界を支えた下野竜也が選ぶ「祈りの音楽」を聴く -6/11(金)&12(土)東京芸術劇場

6月11、12日は、下野竜也が指揮するイギリスの2作品とブルックナー。海外の指揮者がほとんど入国できなかったこの1年、国内のオーケストラには「日本人特需」とも言える現象が生まれました。当然下野さんのもとにも、各地から出演依頼が殺到しましたが、ご本人としては、こうした状況を素直に喜ぶ気分にはなれなかったようです。仕事が増えて嬉しいと思う以前に、公演を成功

させなければという悲壮感・使命感が先に立ったということです。

ブルックナーの《交響曲第0番》は下野さんの得意レパートリーの一つです。オーストリアの豊かな自然、まるで森の中にたたずんでいるような情景が広がるところに、この交響曲の魅力を感じると言います。

後期の傑作群の萌芽が各所に見出せる点、また彼の敬愛する先人たちの音楽—モーツァルトの《プラハ交響曲》、メンデルスゾーンの《夏の夜の夢》、ワーグナーの《タンホイザー》等々の面影を発見できるのも、この曲を味わうポイントだと思えます。

もう一つ忘れてはならないのが、宗教音楽との関わりです。第2楽章にはブルックナーの自作《ミサ曲ホ短調》の〈世の罪を除きたまう主よ〉が、第4楽章には《ミサ・ソレムニス》の〈ホザンナ〉や、合唱曲《アヴェ・マリア》が引用されています。熱心なカトリック信者であった作曲家の信仰心が、この曲にも反映されていると見てよいでしょう。

ブリテンの《シンフォニア・ダ・レクイエム》は3楽章形式の交響曲で、それぞれの楽章には〈涙の日〉〈怒りの日〉〈永遠の休息を与えたまえ〉という、カトリックの「死者のためのミサ」から取られた標題がついています。

ティンパニの強打に始まり、同じリズムパターンを繰り返しながら緊迫感を増していく〈涙の日〉は、終盤にフォルティッシモの総奏でピークを迎えますが、下野さんによると、長調と短調を同時に奏でるこの箇所、ブリテンの天才ぶりが最もよく表れているとのこと。

続く〈怒りの日〉も、達人のなせる業です。アルト・サクスのメロディ以降、次第に各楽器が加わって、強奏になだれ込む部分の音楽を聴くと、筆者はいつも、同じ頃に書かれた《歌劇「ピーター・グラ임ズ」》の第3幕を思い出します。主人公に向けられた小さな疑念が、口伝てに広がり、加速度的に力を得て、やがて歯止めの効かない憎悪を生む。神の裁きならぬ集団心理の暴力性が、無防備な個人を追い詰めていく場面に似ているのです。

〈永遠の休息を与えたまえ〉で、曲は二短調から二長調に転じます。フルート三重奏の美しさが印象的な、安息の音楽。チャイムを使うことなく、吊いの鐘を感じさせるオーケストレーションは見事という他ありません。

下野さんとN響は、2010年5月にもこの曲を演奏しています。あれから11年、東日本大震災やコロナ禍を経て、社会の様相は大きく変わりました。《シンフォニア・ダ・レクイエム》を演奏する今日的な意義は、いやが応にも高まっているように思われます。年月を重ね、下野さんの作品解釈にも更なる深化が見られるに違いありません。

フィンジはブリテン同様、20世紀イギリスの作曲家です。《前奏曲》は1920年代に構想があったとも言われますが、曲調からは《シンフォニア・ダ・レクイエム》が完成した1940年頃、すなわち第二次世界大戦開始前後の雰囲気を感じます。

曲はラフマニノフの《ヴォカリーズ》を連想させる、哀愁に満ちたメロディで始まります。弦楽合奏の静謐なアンサンブルが続く中、ふとした瞬間に不協和音が入り交じり、痛切な響きが生み出されます。不安な世相の反映でしょうか。クレッシェンドしてへ長調に転じる終結部は、まるで魂の浄化を暗示するようです。

5分程度の短い曲ながら、その構造は《シンフォニア・ダ・レクイエム》とリンクしています。2曲を続けて演奏することで、これらの作品に込められたメッセージが、より明確に浮かび上がってくるのではないかと思います。

未曾有の災厄と、それを克服したのちに得られる平穏の世界、大いなる自然賛美、敬虔な信仰心……。 「今、聴いてほしい音楽」として、下野竜也が選んだのは「祈りの音楽」でした。

「皆で知恵を出しあって、世の中が早く平和を取り戻せたら。ささやかながらこのコンサートが、そのための一助になることを願っています」